古代アメリカ学会第 28 回研究大会
2023 年 12 月 2 日～12 月 3 日
於：京都外国語大学

メキシコ、チアパス州における調査速報

白鳥祐子（京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター）
ブレント・ウッドフィル（Winthrop University）
ホスエ・ロサダ（INAH）

本発表では、発表者らが 2023 年 4 月から 7 月にかけてメキシコ、チアパス州内陸部において行った、塩の生産と消費に関する遺跡の試掘調査および周辺地域の遺跡探索調査の成果を報告する。今回の調査は 2 つの地域に焦点を当てて行われ、一つは中央高地にあるイシュタパ（Ixtapa）市周辺地域と、もう一つはモンテス・アスーレス生物圏保護区（Reserva de la Biósfera Montes Azules）南部とその周辺地域である。イシュタパ市では、チアパス州首都トゥクストラ・グティエレス（Tuxtla Gutiérrez）とサン・クリストーバル・デ・ラス・カサス（San Cristobal de las Casas）の間に位置し、現在まで製塩が行われている地区に隣接するラ・トルトゥーガ（La Tortuga）遺跡を調査した。モンテス・アスーレス生物圏保護区周辺では、サン・イシドロ（San Isidro）遺跡周辺の塩源を調査した。さらに、生物圏保護区内において発表者らは、1695 年にスペイン人によって征服されたラカンドン族の最後の首都サク・バラム（Sak B’alam）探索と試掘調査を試みた。チアパス内陸部における塩生産の歴史を研究する上で、ラカンドン族のサク・バラムは非常に重要であるが、現在に至るまでサク・バラムの場所は特定されていない。

歴史史料によると、ラカンドン・チョル語族は 1586 年にスペイン人によって首都を制圧された後、サク・バラムと呼ばれる都市を築き 100 年以上の間自治統治を維持していたが、1695 年ついにスペイン人によって征服された。サク・バラムはヌエストラ・セニョーラ・デ・ロス・ドローレス（Nuestra Señora de los Dolores）と改名されたが 1721 年に放棄され、その後その場所は不明のままである。発表者らサク・バラム考古学プロジェクト（Proyecto Arqueológico Sak B'alam）は、これまでサク・バラムの探索を行ってきたが、今回 LiDAR による偵察と試掘調査を行った。本発表ではサク・バラムの歴史と研究史、およびそれらを踏まえた今後の調査・研究の展望についても発表する。

チャルチュアパ遺跡のフラスコ状ピット出土種子

伊藤伸幸（名古屋大学）

エルサルバドル共和国西部にあるチャルチュアパ遺跡は、幾つかの建造物群に分かれている。そのうちで、最も早い時期に活動が開始されたエル・トラピチェ地区で実施した名古屋大学の考古学調査において、フラスコ状ピット 4 基と円筒形ピット 1 基が検出されている。フラスコ状ピット 4 基は、E3-1 建造物の南側にあった。2 号フラスコ状ピットは、3-2 トレンチ第 9 南拡張区の西端部分で検出された。このピット開口部分で供物の一部と考えられる炭化物の集中部分があった。

この炭化物を水洗選別したところ、種子らしい丸いものがあった。サン・サルバドル市にあるエルサルバドル自然史博物館（Museo de Historia Natural de El Salvador ）の学芸員に出土した種子を同定していただいた。その結果、出土した種子 2 粒は、現地名でカプリン（Capulín 和名：ナンヨウザクラ）、学名は *Muntingia calabura* で、出土したのはその果実であるとご教示いただいた。そして、その果実はコウモリも食べるとのことだった。

ところで、メソアメリカのフラスコ状ピットについては、先古典期前期（紀元前 2000～900 年）から後古典期（紀元後 900～1521 年）にかけてみられるが、先古典期中・後期に集中している。先古典期後期（前 250～後 250 年）以降に多くの地域ではみられなくなるが、一部地域ではその後も使われている。メキシコ西部からメキシコ中央部、ゲレロ、オアハカ、そして北部を除くマヤと南東部太平洋側地方に分布し、メキシコ中央部、オアハカ、南東部太平洋側で多くみられる。

フラスコ状ピットはメソアメリカにおける貯蔵施設と考えられてきた。しかし、埋葬、儀礼、ゴミ捨て場となった可能性も先行研究から提示されている。

チャルチュアパ遺跡エル・トラピチェ地区で行われた儀礼をメソアメリカでみられるフラスコ状ピットの出土遺物等から考える。

プラヤ・クレブラス遺跡における第一次発掘調査概報

荘司一歩（山形大学）
ディエゴ・カラスコ（クレブラス考古学プロジェクト）
ホセ・サムエル・ケレバル（クレブラス考古学プロジェクト）

これまで発表者は、ペルー北海岸の古期（5000-3000BC）に形成されたマウンド遺構を対象に調査と研究を実施し、生態資源利用と食糧残滓の廃棄実践に着目しながらアンデス海岸地域におけるモニュメントの生成過程について考察を続けてきた。マウンド・ビルディングを中心とした北海岸沿岸部特有のモニュメントの創出過程が明らかになってきた一方で、神殿建築がいち早く出現する北部中央海岸との差異や共通性、関係性をどのように考えるべきかという新たな課題も浮き彫りとなっている。

そこで発表者らは、古期から形成期の移行期におけるモニュメントの生成プロセスを北海岸と比較するため、北部中央海岸を対象に新たな研究プロジェクトを立ち上げることにした。本発表では、このプロジェクトの一環として実施したプラヤ・クレブラス I および II 遺跡の調査成果を報告する。

1958 年に行われた発掘調査により、両遺跡は先土器時代に属することが指摘されているが、詳細な発掘データは報告されていない。そのため、第一次発掘調査では、両遺跡の編年学的な位置づけの解明と層位データの確認を調査目的として設定した。その結果、プラヤ・クレブラス I 遺跡では、角石と粘土を用いた土留め壁と床、食料残滓を大量に含む埋め土によって基壇が構成されていることが明らかになった。さらに、少なくとも２つの建築フェイズが存在し、形成期早期から前期の神殿建築に特徴的な建築材であるシクラス（礫を詰めた袋状の植物製ネット）が各時期の埋め土で検出された。

プラヤ・クレブラス II 遺跡においてもまた、角石と粘土を用いた土留め壁からなる２段の基壇建築であることが確認された。先の例とは対照的に、この基壇はほとんど遺物を含まない大量の砂を埋め土として建設されており、両遺跡には明確な違いが認められる。さらに装飾のない土器の胴部破片が床下から出土していることなどから、両遺跡の建設と利用には時期差があることが想定される。

ペルー北部ネペーニャ市周辺地域における形成期遺跡群の発掘調査

芝田幸一郎（法政大学）
デリシア・レガラード（PIAPFN）
宮野元太郎（東亜大学）

ペルー北部海岸地域の形成期研究においては、祭祀センター遺跡が主な調査対象とされ、編年、生業、地域間関係、地域内関係および社会組織などのテーマが論じられてきた。その中で、「北部中央海岸地域」とも称されるカスマおよびネペーニャの両河谷下流域は、とりわけ多くの祭祀センター発掘データが蓄積されつつあり、地域内における遺跡間の関係をめぐる様々な試論が出てきている。

本研究プロジェクトは、発表者によるネペーニャ下流域ワカ・パルティーダ遺跡における第３次発掘調査（2013 年）を起点としている。この発掘の成果として、祭祀センターにおける壁画群の形で物質化された世界観が一部解明された。次いで 2016～17 年に、発表者らは同遺跡の周辺地域で踏査を実施し、祭祀センター以外の形成期遺跡を複数発見した他、壁画群の世界観と周辺地域の景観に一定の対応関係がある可能性も浮上した。本研究は、上記２件の調査成果としての世界観と景観という視座を、遺跡分布の解釈に導入することで、祭祀センター、居住エリア、墓地等各種遺跡の立地・配置を再検討するものとしてスタートした。

2023 年から２シーズンの調査で、合計４遺跡（ワカ・パルティーダ、スーテ・バホⅠ、スーテ・バホⅡ、セロ・ブランコⅡ）７地区の発掘を行う予定である。今シーズンは３遺跡３地区の発掘を実施した。上記研究目的の要となるスーテ・バホⅡ遺跡は居住エリアを含むが、その発掘は土地所有企業の消極的拒絶によって実現できていない。そこで本発表では、新規発掘調査を実施したセロ・ブランコⅡ遺跡に関する速報を中心に、今回ワカ・パルティーダ遺跡で実施した第４次発掘調査の速報も若干交えながら、これらの成果を現時点におけるプロジェクト全体の中に位置づけ、今後の展望を示したい。

ペルー北海岸形成期マウンドの立地とその基礎構造
―ネペーニャ谷スーテ・バホ遺跡の事例から

宮野元太郎（東亜大学）
芝田幸一郎（法政大学）
デリシア・レガラード（PIAPFN）

ペルー北海岸ネペーニャ谷の形成期マウンド、スーテ・バホ遺跡の発掘調査報告である。ネペーニャ谷下流域の川床部には多くの形成期のマウンドが遺されており、2016 年から 17 年に本調査チームがドローン測量によるデジタルモデル化を行った 22 件のマウンドのうち、19 件が形成期のものである可能性を示していた。このうち、ワカ・パルティーダ遺跡やセロ・ブランコ遺跡など、調査が進められているものもあるが、しかしこれらマウンドの建築プログラムや谷全体の包括的な建築計画については、まだ解明されていない。

ワカ・パルティーダ遺跡から南西約 700m の場所にあるスーテ・バホ遺跡は、これまで発掘も登録すらもされていなかった 1 辺 40m 程の方形のマウンドである。過去に本調査チームにより実施された表面観察と測量調査から、形成期後期の建築である可能性が示されていた。ワカ・パルティーダ遺跡にほど近い場所にほぼ同時期に建設されたこのマウンドはどのような性格な建築だったのか。同谷の川床に広く点在する形成期マウンドもしくはモニュメント建築の建築プログラムを知るためのデータを提供することが期待される。

2023 年、スーテ・バホ遺跡最初のシーズンはマウンド北面の発掘から着手された。ここで、形成期後期だけでなく、中期からの建築とのその構造の一部が明らかにされた。本発表では、ここで観察された建築活動の変化、特にマウンドの基礎構造とそこから想定される立地戦略に着目し、建築プログラムに関する現時点での考察、及び今後の展開の可能性を示す。

メキシコ国立人類学博物館展示理念および展示方法の変遷

渡辺裕木（慶応義塾大学）

本研究では、来年で設立 60 周年を迎えるメキシコ国立人類学博物館における展示を、博物館学および博物館技術的観点から通時的に考察し、同博物館がメキシコ人のアイデンティティ形成においていかなる役割りを果たして来たかを考察する。

同博物館は、前身である博物館の設立から数えると、2025 年に 200 周年を迎えるが、黎明期から 20 世紀初頭の革命を経て、新しい博物館に生まれ変わるまでの全ての段階で、国の人類学の発展や、人類学を巡る政治的背景の強い影響を受けてきたことが既に多くの研究者に指摘されている。また 1964 年竣工の現在の博物館は、設計者 Pedro Ramírez Vázquez 氏らによると、メキシコ国民が博物館での経験によって自国民であることに誇りを感じられることを最重要の目的としている。実際、新しい博物館は開館以降、常に国内で最も訪問者の多い博物館であり、同館がメキシコの文化を象徴する場所であることは様々な媒体を介して広く周知されている。本研究では、博物館に与えられた役割が各展示室の展示理念や展示方法の決定に及ぼした影響および、開館以来の 60 年間でいかに変化してきたか、その変遷を考察し、鑑賞者が展示資料である考古遺物や民族誌学資料から得る情報やイメージを検討する。

設立当時の展示理念、方法などについて、Carlos Vázquez Olvera 氏らによる先行研究の精査に加え、博物館歴史資料室が所蔵する開館以前から(1950 年代以降)の文書を検索し、設立準備に影響したと考えられる社会的背景および、開館後の展示室改修や展示替えのプロジェクトに関する記述から、同博物館展示が来館者に与えた情報、イメージを考察、同館がいかに機能してきたかを理解したい。

発表では、本年 8 月～9 月に実施した、博物館歴史資料室の文書精査の経過を報告する。また、博物館所属研究員に対するインタビューおよび現在同館で実施中の民族誌学展示室改修の現場見学から考察する改修の目的、これからの展示理念および方法を考察する。

遺跡公園と道―チチェン・イツァへのアクセスの変遷と公園内外で起こる変化について

杓谷茂樹（公立小松大学）

本報告はメキシコ、ユカタン半島のチチェン・イツァ遺跡公園に関与するステークホルダーのあり様の変化を、遺跡へのアクセスルートあるいは道の変遷という視点から整理し直し、考察していこうとするものである。

チチェン・イツァ遺跡公園を対象にした観光は、概ね 1920 年代初頭にはじまるが、それ以来、ユカタン半島を横断する国道 180 号線がチチェン・イツァへのアクセスの基本となってきた。その後、カンクンの開発が一段落ついたり、チチェン・イツァが世界遺産登録されたりしたタイミングで、何度かこの道を通った遺跡公園へのアクセスルートが変化してきた。そして 1990 年代前半にメリダとカンクンの間に高速道路が開通し、バリャドリッドとともにチチェン・イツァ近くのピステにインターチェンジが開設され、カンクン、メリダ両都市からチチェン・イツァまでの時間が大幅に短縮されて現在に至る。

発表者は、これまでチチェン・イツァ遺跡公園における地元露店商の不法侵入問題を考える中で、行政や観光業界、そして地元住民などに属するさまざまな立場のステークホルダーが互いに緊張関係を作り出して、とりあえずバランスがとれている状況にあるために、この問題が解決しないまま現在まで継続していることを明らかにしてきた。本報告では、そうした遺跡公園内外の状況と上記のようなチチェン・イツァへのアクセスルートの変遷との関係について整理する。

当地では 2023 年 12 月にロペス・オブラドール大統領肝いりの国家プロジェクトとして建設された、Tren Maya という鉄道が開通し、ユカタン半島をぐるりと巡ることになるが、チチェン・イツァという駅が開設されることで、同遺跡公園に新たなアクセスルートが出現することになる。そして、これにあわせて遺跡公園へのアクセスがこれまでにないほど大きく変更されることになるばかりか、新たに出現する「国家」という強力なステークホルダーが、遺跡公園内外に大きな影響を及ぼすことは間違いない。今後のチチェン・イツァ遺跡公園の状況にいかなる変化をもたらされるのか観察を続ける必要がある。

＊本報告は、JSPS 科研費（基盤研究(Ｂ)）「被征服者が生んだ現代メキシコとその軌跡：歴史的資源の通時的研究による新たな歴史像」（JP22H03844、代表；大越翼）の研究成果の一部である。

クラビヘーロ『メキシコ古代史』における先スペイン期文明像
――「論述」を中心に――

井上幸孝

本報告は、メキシコ植民地時代後半からメキシコ独立期にかけてのクリオーリョが近現代のメキシコ古代史像形成に及ぼした影響に関する研究の一環として、現時点での研究の進展を報告するものである。フランシスコ・ハビエル・クラビヘーロ（Francisco Xavier Clavigero）は、1731 年、ベラクルス生まれのイエズス会士である。1767 年のイエズス会士の追放によってヌエバ・エスパーニャを追われてボローニャに亡命し、『メキシコ古代史（*Historia antigua de México*）』（1780 年、イタリア語版）などの著者を残したことで知られる。

本報告で着目する『メキシコ古代史』は、全 10 書から成る壮大な歴史叙述である。メキシコの地誌、トルテカ人など古代の人々の歴史、メシーカ国家の繁栄、スペインによる征服の経緯といった広範な内容を扱っている。同書には、本編とは別に「論述（Disertaciones）」と題された部分があり、①アメリカ大陸先住民の由来、②古代メキシコの時代区分、③メキシコの土地、④メキシコの動物、⑤古代メキシコ人の特徴、⑥古代メキシコ人の文化、⑦アナワクの住民、⑧古代メキシコ人の宗教、⑨フランス病というテーマの 9 編がその中に含まれている。本報告では、これらの「論述」を中心にクラビヘーロの先スペイン期文明イメージを扱う。

まず、「論述」が書かれた当時のヨーロッパ知識人層の思想的背景を整理し、クラビヘーロが征服以前のメキシコの歴史を積極的に評価しようとした点を確認する。そのうえで、彼がどのような情報源に基づいてメキシコの古代史を描き出そうとしたのかを考察する。従来、『インディアス王国誌（*Monarquía indiana*）』（1615 年）を著したフランシスコ会士トルケマーダとの類似が指摘されることが多かったものの、実際にはクラビヘーロの古代史の記述ははるかに多様な情報源に依拠していたことが指摘できる。このことは、植民地時代の様々な歴史記述の潮流と独立後の古代メキシコ史像の橋渡し役となったクラビヘーロの著述が 16～17 世紀の先住民記録の影響を受けていたことも示している。つまり、クラビヘーロによる先スペイン期の文明像は、クリオーリョという「他者」が同時代の思想的背景に応じつつ描き出したものであると同時に、植民地時代前半の先住民記録者が解釈した歴史像を再利用したものでもあったと考えることができる。

＊本報告は、JSPS 科研費（基盤研究(Ｂ)）「被征服者が生んだ現代メキシコとその軌跡：歴史的資源の通時的研究による新たな歴史像」（JP22H03844、代表；大越翼）の研究成果の一部である。

異質な空間から慣れ親しんだ空間へ：植民地時代のユカタン・マヤ先住民社会における空間認識に関する一考察

大越翼（京都外国語大学）

1552 年からユカタン総督府領内で開始された「集住政策（Política de congregación）」により、先スペイン期の拡散型居住パターンを持っていた先住民社会は、広場（Plaza）を中心とした碁盤の目状の街路を持つ、幾何学的な外観を呈した村（pueblo）の集合体へと物理的変容を遂げていった。人々は、それぞれのグリッド内にまとまって居住するようになり、これにより植民地当局は、先住民をより効率的に管轄し、収税のみならずキリスト教への改宗とその後の監督を容易にすることができたのであった。

これまで、植民地時代の先住民社会を論じる際に、この居住形態の変化は、それが物理的に把握できるものであるが故に、征服後のマヤ社会の文化変容の代表的な例だと考えられることが多かった。しかし、ここ 10 年ほどの歴史学的研究は、先住民は、征服中そして征服後もそれ以前と同じ論理を用いつつ新たな時代を柔軟に生き延びていったとする、「歴史の連続性」に着目すべきであることを強調している。本発表は、この歴史学的研究の動向を踏まえた上で、植民地時代のユカタン・マヤ社会がどのように「集住政策」によって創出された居住形態に対応して来たのかを、史料分析と民族学的データをもとに考察するのを目的としている。

具体的には、カンペチェ州ヌンキニ村における野外調査をもとに、「碁盤の目状の街区」には当てはまらない、中央広場もしくは教会に向かう斜めの街路の存在、および各街角（esquina）に付されている名前（通称、あだ名）に着目する。これらはスペインによって強制された新大陸植民地における町や村の幾何学的街区の理念型、および設置規定にはなかったものである。斜めの街路は、かつて村の中央にあった先スペイン期の建造物に到達するためのもので、それを集住政策の中でもきちんと残し、今度はその建物を破壊して建立された教会へ向かう道として利用され続けたことを示している。また、街角に名前が付されていることは、先住民が自らの先スペイン期に起源を持つ空間認識方法を新たに創設された空間に応用した結果なのであり、押し付けられた異質な空間を、「名前」を付すことによって自らのものにした事実を意味しているのである。

＊本報告は、JSPS 科研費（基盤研究(Ｂ)）「被征服者が生んだ現代メキシコとその軌跡：歴史的資源の通時的研究による新たな歴史像」（JP22H03844、代表：大越翼）の研究成果の一部である。

ワリの植物図像

土井正樹（関西外国語大学）

ワリ帝国は 7 世紀から 11 世紀にかけて、現在のペルー中央高地を中心として勢力を誇っていたと考えられている。このワリ帝国の主要遺跡の一つとして知られるのが、ペルー南海岸のパチェーコ遺跡である。そこでは、1927 年にペルー人考古学者フーリオ・C・テーヨによる発掘調査が行われ、多様な植物図像が描かれた土器が複数出土した。図像の植物種はエウヘニオ・ヤコブレフによって同定され、それらは当時の食生活を知るための貴重な資料となっている。

ヤコブレフ以降、ワリ帝国関連土器の植物図像に関する研究に進展はなかったが、1997 年以降、ワリ帝国の主要遺跡のひとつであるコンチョパタ遺跡で継続的な調査が実施され、その過程で植物図像を有する土器が出土していた。その情報を得て、2000 年に発表者はワリ帝国関連土器に表現された植物図像の調査を開始した。調査では、コンチョパタ遺跡から出土した土器の植物図像を中心に資料収集し、リマの人類学考古学歴史学博物館など、博物館の収蔵品に関する調査も実施した。コンチョパタ遺跡出土土器に描かれた植物図像の中にはこれまで知られていない植物図像も含まれており、それらに関してはワマンガ大学の専門家の助力を得て植物種の同定作業を行った。並行して、図像に表現された植物の、実際の栽培状況を確認するためのフィールドワークも実施した。

その後発表者は学位論文執筆のため別の研究テーマに取りかかることになり、植物図像に関する調査を中断したため、これらの研究成果のほとんどは未発表となっている。現在、当時撮影したフィルム写真のデジタル化を進め、これらの研究成果をまとめた論文を準備しているところである。本発表では①これまでに収集した資料の概要、②収集資料が示すペルー中央高地コンチョパタ遺跡と南海岸パチェーコ遺跡との関係、そして③これまで「トウモロコシの果穂」と解釈されてきた図像の問題、について報告する。

ワリ期に何が起こっていたのか？　ペルー北部の事例より

渡部森哉（南山大学）
フアン・ウガス（テルレン＝ラ・ボンバ調査団）

ワリ帝国はワリを首都として後９世紀から１０世紀にかけて拡張した。北はペルー北部のカハマルカ地方、南はクスコ地方までを支配下に治めたとされる。本発表では、ワリ帝国が台頭した時代に地方でどのような変化が生じていたのかを考察する。事例とするのはペルー北部のカハマルカ地方である。

ワリ様式土器が出土する遺跡において、しばしばカハマルカ様式の土器が共伴することが知られている。そのためワリとカハマルカは対等な力関係にあった、同盟関係にあったという解釈もあった。しかし、カハマルカ地方にワリ帝国の行政センターであるエル・パラシオが確認されたことから、発表者はカハマルカの人々がワリ帝国の支配下にあったと考えている。一方で、カハマルカ文化の土器がワリ帝国期にも製作が続けられ、他の地域でも出土する理由については未だに明快に理解されていない。他の地域では、モチェ文化の土器やレクワイ文化の土器など、ワリ期までに製作が終わった事例が多く、ましてやカハマルカ様式土器のように他地域でも出土する土器はないのである。

カハマルカ様式土器が存続した一方で、新たな土器様式もワリ期に現れた。こうした土器群がワリ期に生じた変化を理解する鍵となる。土器編年に従えば、ワリ期の遺跡がカハマルカ地方、特にヘケテペケ川中流域に多く位置する。いずれも利用がワリ期に限定されており、その前の時期、あるいは後の時期の痕跡がない。そして多くの土器様式や埋葬形態が確認されているため、どの文化の遺跡なのかという同定が難しい。そもそも特定の文化に振り分けようとすること自体がワリ期を理解する枠組としては適切ではないのかもしれない。本発表ではペルー北海岸とカハマルカ盆地を結ぶ重要なルートであるヘケテペケ川流域に多くの遺跡が位置する理由、それらの遺跡を評価する基準について考察する。そしてそこからワリ期とはどのような時代だったのか、どのような変化が生じていたのかという問題を扱う。

ペルー共和国ワヌコ州の上部アマゾン地帯における考古学調査

金崎由布子（東京大学総合研究博物館）
カルロス・ビビアノ（ペルー国立サン・マルコス大学）
大谷博則（ワヤガ川上流域一般調査プロジェクト）
ホセ・オノフレ（ペルー文化省ワヌコ支局）
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

本発表では、ペルー共和国ワヌコ州の上部アマゾン地帯における考古学調査の成果を報告する。アンデス文明の形成において、アンデス・アマゾン間の地域間交流は重要な役割を果たしたと考えられる。ペルー北部中央山地ワヌコ盆地では、形成期前期からアマゾンの影響を大きく受けた土器が出現するなど、早くから当地域との活発な交流が行われていたことを示す痕跡が見られる。しかし、壮麗な神殿建築が数多く残存し、多くの調査が行われてきたアンデスの海岸・山間地域に比べて、深い森に覆われたアマゾン低地の研究は遅れている。そこで発表者は、アンデス・アマゾン間の境界領域となるセハ・デ・セルバ地帯から上部アマゾン地帯にかけての集中的な考古学調査に取り組んできた。本発表では、発表者らが 2023 年夏季に実施した、ワヌコ州の森林地帯での広域踏査および試掘調査の成果を報告する。

当地域ではこれまで、1960-70 年代にわずかな数の遺跡の存在が報告されているのみであったが、本年の調査の結果、約 30 の新たな遺跡の存在が明らかになった。主な遺跡の種類は洞窟遺跡、畑での土器分布、および岩絵であり、石造の建築が確認されたのは一例のみであった。また、このうちほとんどは corrugate horizon と呼ばれる土器の特徴を持つ、先スペイン期後期に属する遺跡であった。踏査では土器片のほか、石斧も多く発見された。

また、試掘を行ったピラミッド洞窟遺跡では、上層では先スペイン期後期のものと思われる分厚い粗製土器が出土したが、下層からは形成期のものと考えられる極めてつくりの良い有文土器が出土した。さらに、洞窟内の別地点の発掘では、最下層には土器が伴わず、スクレーパーや多量の剥片が出土した。

これらの発見は、いまだ基礎的な編年すら確立していない上部アマゾン地帯の研究を大きく進めるものとして重要であり、今後継続的な調査を行っていく予定である。

パブリック考古学と地方自治体
―ペルーリマ市における地方自治体との協働にともなう問題とその対策

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（立命館大学）

ペルーにおけるパブリック考古学調査の実施は、遺跡に関心を持つ多様な関係者の存在によって、困難をともなうことが多い。その中でも特に重要なアクターの一つが、地方自治体である。地方自治体は、考古遺産の保護に関心を持ち、専門家と手を携えて活動を実施する中心的な主体である。しかし、実際には、考古遺産をどのように扱うのかということに関する計画を持っている地方自治体はほとんどなく、管轄内に存在する遺跡に影響を及ぼす可能性のあるようなプロジェクトに対して、考古学者などのアドバイスを受けてもいないのが実状である。

「ワカス・デ・ラ・モリーナ」パブリック考古学プログラムは、2015 年からラ・モリーナ区（ペルーリマ市）の考古遺産に関する活動を行っており、3 つの地域政府行政（2015-2018、2019-2022、2023-現在）　との協働を経て、考古遺産の管理や保護における様々な問題に直面してきた。第一の問題は、地区内に存在する遺跡や遺物に関する情報が不足していることから、効果的な保護活動が行えない。第二の問題は、自治体や地域住民によって公園における改善のためのプロジェクトが提案されることはあるが、その内容には文化遺産に関する法律や文化省からの勧告が考慮されていないために、プロジェクトが実施できないことである。そして最後に、遺跡の管理方法について、地域住民の間に多様な考えが存在し、地方自治体がコンセンサスを得ることができないという問題がある。

本発表では、これらの問題とその社会的背景を明らかにしたうえで、ラ・モリーナ地区におけるパブリック考古学プロジェクトという視点から、一つの解決策を提示する。

ラ・モリーナ区の遺跡について写真展
（ラ・モリーナ区立図書館・2018 年 9 月）

古代アメリカの教科書問題：中学歴史と高校歴史総合・世界史探究の改善を目指して

青山和夫（茨城大学）
井上幸孝（専修大学）
吉田晃章（東海大学）
渡部森哉（南山大学）
松本雄一（国立民族学博物館）

古代アメリカに関する研究成果の普及と歴史教育への貢献は、古代アメリカ学会と会員の重要な使命である。2022年12月の古代アメリカ学会総会において、青山を座長とする中学歴史・高校世界史の教科書の改善案作成ワーキンググループ（以下、中高教科書WG）を役員会のもとに設置することが決定した。中高教科書WGは、青山（メソアメリカ考古学・マヤ文明学）、井上（アステカ史・メキシコ史）、吉田晃章（中南米考古学）、渡部森哉（アンデス考古学）と松本雄一（アンデス考古学）で構成される。

中学歴史の教科書において、今なお時代遅れの「四大文明」・ユーラシア大陸中心的な歴史が語られ続けているのは大きな問題である。高校地理歴史の科目では、従来は「世界史」（世界史 A または世界史 B）だけが必修であり「日本史」と「地理」は選択必修科目であった。高等学校学習指導要領［文部科学省 2018］に基づき、18 世紀以降の近現代の世界と日本の動向を関連付けて学ぶ「歴史総合」が 2022 年度に新設され、必修化された。つまり結果的に高校世界史の必修教科書の内容が大規模に改変され、近世以前の部分が大幅に削除されてしまったのである。一方で前近代と近現代を学ぶ「世界史探究」（従来の「世界史 B」に相当）が 2023 年度に導入され、選択科目になった。大変残念ながらバランスの取れた世界史を学ぶ上で、今後の高校世界史教育のあり方が大いに懸念される。

中高教科書WGは、8社の中学歴史の教科書8冊、8社の高校歴史総合の教科書12冊、5社の高校世界史探究の教科書7冊という、2023年度に出版された全27冊の歴史教科書における古代アメリカに関する記述を検討し、教科書改善案を2023年9月に教科書会社に送付した。同時に中高教科書WGは、文部科学大臣と文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室に中学歴史と高校歴史総合・世界史探究の教科書の問題点と改善案を提示し、古代アメリカをきちんと教育する学習指導要領が策定されるように要望書を提出した。本発表では、中学歴史・高校世界史の教科書の問題個所と改善案の一部を速報として報告する。

東京大学総合研究博物館所蔵染織品の調査概報
―放射性炭素年代測定および炭素・窒素同位体比分析を中心に―

浅見恵理（埼玉大学）
西澤弘惠（東京大学）
鶴見英成（放送大学）
瀧上舞（国立科学博物館）
尾嵜大真（東京大学総合研究博物館）
大森貴之（東京大学総合研究博物館）
米田穣（東京大学総合研究博物館）

東京大学総合研究博物館には、調査や寄贈により収集された古代アンデスの染織品資料が収蔵されている。出土地不明の資料が大半ではあるものの、遺跡名が判明している資料もある。技法と文様でおおよその文化は特定できるが、不明なものも多いのが現状である。

染織品研究において、技法の解明は進展している。しかし、文化が継続するなかでどのように各技法が発展していったのか、といった変化までは追えていないのが問題点として挙げられる。例えば、技法や文様に共通性が見られる資料群でも、糸の材質の違い（木綿か獣毛）や文様の構図に差異があり、それが時期差や地域差に由来するものなのかは不明なのである。そこで、本研究の 1 つ目の目的は、年代測定を実施し、技法や文様の時期的変遷を把握することである。

さらに獣毛に関して、古代アンデスでは S 撚り双糸が主流であることから、ラクダ科動物の毛を山地で撚って糸の状態にしてから各地域に流通させていたことが伺える。木綿は S 撚り・Z 撚り、単糸・双糸のすべての組み合わせがみられる一方で、獣毛は一貫して S 撚り双糸が使用される。その背景を解明するためには、技術的側面に加えて、山地以外の環境帯でラクダ科動物が飼育された可能性も含めた検証が必要である。本研究の 2 つ目の目的は、炭素・窒素同位体比分析を行い、織物に使用されたラクダ科動物の食性を調査することである。

今回分析対象とした資料は、遺跡名や採集地が判明している資料を含めた 23 点である。木綿と獣毛の両方が使用されている織物は、両方採取して年代測定および炭素・窒素同位体比分析を行った。年代測定の結果、おおむね予想通りの年代が示されたが、一部予想とは異なる時期を示す布も含まれていた。また織物に使用された獣毛で炭素・窒素同位体比分析を行い、飼育された個体の食性を調べたところ、飼育環境は高地高原だけでなく、やや温暖な環境帯も含まれる可能性が示唆された。

笛吹きボトル土器の音響解析―模型を用いた実験成果の概要―

吉田晃章（東海大学）
喜多理王（東海大学マイクロ・ナノ研究開発センター）
鶴見英成（放送大学）
真世土マウ（岡山県立大学）
粟野若枝（東海大学イメージング研究センター）
石山泰成（東海大学大学院）
渡邉廉（東海大学大学院）
加賀美祐介（東海大学大学院）

笛吹きボトルとは、ホイッスル（笛玉）を備え、土器内部で水と空気が移動する時に音が鳴る内部構造が比較的複雑な土器である。エクアドルの資料群についての研究では、葬儀、儀式、祝祭と関連した用途が示唆され、またボトルの形状と機能はエクアドルにおいて約1500年にわたって変化してきたとされる。しかし笛吹きボトルの構造の多様性と、そこから生じる音の多様性の関係を、定量的に科学分析した研究例は数少なく、またペルー各地の地方文化において形態的に多様な発展を遂げた資料群の検討も進んでいない。

そこで発表者らは東海大学文明研究所が所蔵するアンデス・コレクション等 52 点の笛吹きボトルのＸ線 CT 撮影を行い、成形方法と構造からタイプ分類を実施し、体系的な研究を進めてきた。器形や土器内部の空気と水の動きに注目した試験的なタイプ分類をもとに、市販のペットボトルなどを使用して、代表的なタイプの笛吹きボトルの模型を製作した。オリジナルの形状では、変数が多いため、音響解析の比較実験に適さないためである。録音スタジオで実際に水の入った模型をシーソー台の上に置き、一定のリズムで台を傾け、再現性の高い状態で笛吹きボトルの音を録音した。笛玉の穴の口径や送風管の長さ、注口部分の形状を、アタッチメントなどで変更できる模型を作成し、録音した。また胴部連結部分の長さ、水量や傾けるスピードなどを変更することもおこない、比較できる音源を収録した。録音にあたっては、マイク、オーディオインターフェース、録音ソフトを使用した。さらに解析ソフトを使用して、音源をフーリエ変換し、周波数とデシベルにより音の特徴を可視化した。本発表では、解析した音源を比較検討することから見えてきた、内部構造の特徴と音（周波数）の関係について発表する。

ペルー北部インガタンボ遺跡とトゥルコ遺跡の発掘調査

山本睦（山形大学）
オスカル・アリアス（ペルー国立サン・マルコス大学）
大谷博則（インガタンボ考古学プロジェクト）

2023年の8月から9月まで、ペルー北部カハマルカ州ハエン郡にあり、形成期の活動が確認されている二つの遺跡で、発掘調査を実施した。一つは2006年より継続的な発掘調査を続けるインガタンボ遺跡で、もう一つは今回はじめて発掘を実施するトゥルコ遺跡である。

2022年には両遺跡において、LiDAR（Light Detection and Ranging）、UAV（Unmanned Aerial Vehicle）、そしてGNSS（Global Navigation Satellite System）を用いた測量調査と踏査を実施し、詳細な地形図を作成することで、樹木に覆われた遺跡の全体像の把握に努めてきた。本発表では、この測量調査と踏査の結果をふまえて実施した、各遺跡の発掘調査の概要について報告する。

インガタンボ遺跡では、当遺跡で最大の基壇であるA基壇の南東隅と、A基壇の東に位置するB基壇を発掘した。A基壇では、ハエン地方をはじめとしたペルー北部熱帯低地との関係を示唆するようなポマワカ期（前1200年～前800年）の円形構造物にくわえて、それを覆うように築かれたインガタンボ期（前800年～前550年）の低層基壇が確認された。また、B基壇では、ポマワカ期とインガタンボ期の活動は確認されたものの、A基壇とは異なる特徴をもつ建造物および土器がみつかった。その結果、二つの基壇は同時期に機能している一方で、性格の異なる建造物であった可能性が示された。

これにたいして、トゥルコ遺跡では、インガタンボのような明瞭な基壇が築かれずに、自然地形を活かしてマウンド全体の形状が整えられたうえで、頂上部には部屋状構造物がつくられたことが明らかになった。こうしたマウンドは、ハエン地方に多くの類例が確認されるものである。出土した土器はローカルな特徴を多分に有するものであったが、形成期、なかでも形成期中期（ポマワカ期）のものと推測される。

全体としては、ハエン地方における形成期の祭祀建造物の建築特徴に関する新たなデータのほか、当該地域の編年を精緻化し、地域間の関係性を考察するための基礎となる土器などのデータを入手できた点が、本調査の重要な成果である。

ラ・カピーヤ遺跡「巻貝の神官の墓」出土装飾品の分析概報

荒田恵（天理大学附属天理参考館）
関雄二（国立民族学博物館）
フアン・パブロ・ビジャヌエバ（ペルー国立サン・マルコス大学）
ダニエル・モラーレス（ペルー国立サン・マルコス大学）

「巻貝の神官の墓」は、2022 年に 8 月にペルー北高地パコパンパ考古遺跡複合内のラ・カピーヤ遺跡において発見された。ラ・カピーヤ遺跡は、パコパンパ遺跡の中央神殿からのびる建築の中心軸を、東側に約 600m 伸ばした場所に位置している。2015 年から断続的に行われている 4 シーズンの発掘により、パコパンパ I 期にあたる擁壁やカハマルカ期の建築が確認されている。

「巻貝の神官の墓」の被葬者は紀元前 1400 年頃～紀元前 1200 年頃の宗教的指導者と推定されており、一部に刻線が施されたストロンブス貝（カブトソデガイ）が 20 点も出土したほかに、大量の石製装飾品が副葬されていたことが報告された。被葬者の頭部付近で、円盤状、方形板状、そしてサン・ペドロ（サボテン）の断面などを象った石製装飾品が出土したことに加えて、身体の他の部位からも同じ素材でつくられた首飾りや胸飾り、大量のビーズ玉、そして石製装飾品と同様の形を呈した貝製品が確認された。

昨年度の調査では、「巻貝の神官の墓」に副葬された大量の石製装飾品の全容が把握できなかったため、今年の 7 月末から 8 月末にかけて行った分析では、一部の貝製装飾品も含めて、器種分類、カウント、計測などを行いながら、副葬品の特徴および出土傾向をとらえることを目的とした。

その結果、カウントができた石製・貝製装飾品の総点数が 9 万点を超え、そのうち 8 万 5 千点以上が石製ビーズ玉であることが確認できた。その素材については未同定であるが、クリソコラ（珪孔雀石）であると推定される。ビーズ玉以外の石製装飾品についても同様であると考えられるが、ソーダライトと推定される玉製品も一定数含まれることが確認できた。

また、大きさにはバリエーションがある一方で、特定の形を選択する傾向がみられたほか、大半の石製装飾品が被熱している可能性が指摘できた。被熱しているものは意図的に火にくべられたと推定されるが、その目的の解明は今後の課題とする。

クントゥル・ワシ遺跡　第 3・第 4 テラスの発掘調査

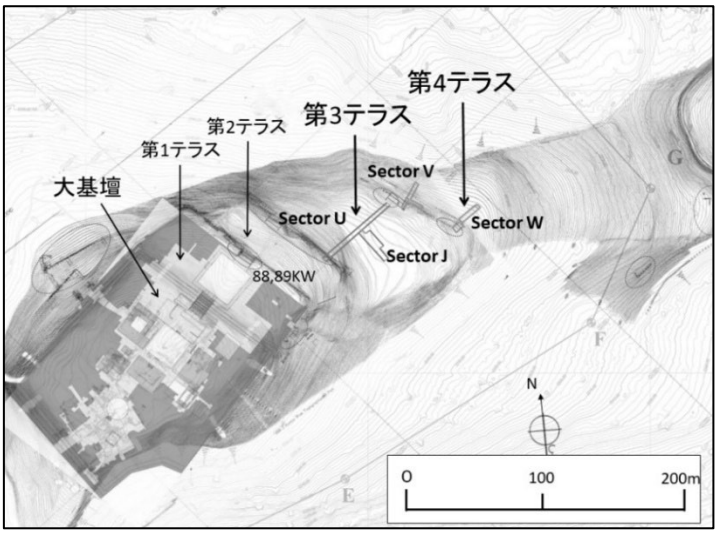
井口欣也（埼玉大学）
ディアナ・エレラ・チュキリン（ペルーカトリカ大学）

ペルー北部山地、形成期の神殿遺跡クントゥル・ワシでは 1988 年の発掘調査開始以来、祭祀建造物が集中する丘の頂上部（大基壇）を主な対象として発掘調査が行われてきた。その結果、形成期中期（イドロ期）から後期（クントゥル・ワシ期、コパ期）にかけての祭祀建造物の重なりと、末期（ソテーラ期）における神殿放棄までの変容過程が明らかにされた。

同遺跡では大基壇上から北東側に少なくとも 4 つのテラスが築かれていたが、第 2 テラス以下ではこれまで部分的な発掘しか行われていなかった。大基壇上と第 1 テラスでは、基壇、広場、部屋状構造等から構成される建造物が集中しているが、その周辺に位置する下方テラスではどの時期にどのような活動が行われていたのか。この課題を追究するため、2019 年と 2022 年にそれぞれ第 4 テラス、第 3 テラスのトレンチ発掘調査を実施した。

当初、下方テラスは、大基壇上で活発な建設活動がみられる形成期後期のコパ期につくられたものと予想していた。発掘調査の結果、第 4 テラスでは形成期後期の遺構や埋葬が検出されたが、第 3 テラスでは中期（イドロ期）の遺構が検出されるとともに、クリソコラやソーダライト製ビーズ玉の副葬品などを伴う墓も発見された。一方、形成期後期の遺構は、第 3 テラスの今回の発掘では検出されなかった。

大基壇上では、クントゥル・ワシ期のはじめにイドロ期の建築物がすべて埋められ、新しい神殿が建設されたために形成期中期のデータは少なかった。今回の調査によって、中期の活動が予想以上に遺跡の広範囲に及ぶことがわかった。このため、クントゥル・ワシの神殿創始と形成期前期から中期に機能していた隣接するセロ・ブランコとの関係、中期における地域間交流、そして形成期後期に大基壇上で見られた神殿刷新のあり方について、再検討の必要性が生じることとなった。



クントゥル・ワシ遺跡：大基壇と 4 つのテラス（©クントゥル・ワシ調査団）

ペルー北部中央山地ワヌコ盆地における形成期後期から末期にかけての土器の変化

佐藤優音（東京大学大学院）
金崎由布子（東京大学総合研究博物館）
鶴見英成（放送大学）

本発表では、ペルー北部中央山地ワヌコ盆地における、アンデス文明形成期後期から末期にかけての土器の変化について報告する。ワヌコ盆地では 2016 年から 2018 年にかけて、地域編年の高精度化を主目的とする考古学調査プロジェクトが行われ、コトシュ遺跡とハンカオ遺跡の二遺跡の発掘調査が実施された［Tsurumi and Acuña 2018; 鶴見・サラ 2016; Tsurumi and Sara 2017］。この調査ではこれまで、形成期前・中期にあたる紀元前二千年紀の土器の変化について成果報告が行われていた［Kanezaki et al. 2021］。本発表では、これまで未発表であった、形成期後・末期における当地域の土器の変化に関する分析結果について報告する。

形成期後期のワヌコ盆地には、カイェホン・デ・コンチューコスに位置する形成期の大神殿、チャビン・デ・ワンタルのものと非常によく似た土器が存在することがこれまで指摘されてきた。一方末期になると、当地域では、後期の要素を残しつつも新たな器形や装飾要素を持つ、地域独自の土器スタイルが発達した。本研究では、この変化のプロセスを詳細に明らかにすることを目的とし、上記の調査で新たに得られた土器資料を対象として分析を行った。

分析の結果、ワヌコ盆地の形成期後期は、チャビン・デ・ワンタルのものとよく似た土器が用いられる前半期と、前半期の要素を引き継ぎつつも、つくりがより簡素化した土器が用いられる後半期の二時期に細分されることが明らかになった。このような土器の変化は、先行研究でも予示されていたが、本研究では実際に建築の上下関係からこれらの土器が異なる時期に細分可能であることが確認された。また、本調査で新たに得られた年代データもこの結果を支持するものであった。

参考文献

Kanezaki, Yuko, Takayuki Omori, and Eisei Tsurumi
2021 Emergence and Development of Pottery in the Andean Early Formative Period: New Insights from an Improved Wairajirca Pottery Chronology at the Jancao Site in the Huánuco Region, Peru. *Latin American Antiquity* 32(2): 239-254.

Tsurumi, Eisei, and Lissete Acuña Sánchez
2018 *Proyecto de investigación arqueológica: jancao, distrito de Amarilis, provincia de Huánuco, departamento de Huánuco. Temporada 2017. Excavación.* Instituto Nacional de Cultura, Perú.

鶴見英成、セサル・サラ

2016 「コトシュ遺跡の測量と形成期早期の神殿研究の展望」『古代アメリカ』19: 35-46。

Tsurumi, Eisei, and César Sara Lepetto

2017 *Proyecto de investigación arqueológica: Kotosh, distrito de Huánuco, provincia de Huánuco, departamento de Huánuco. Temporada 2016. Excavación.* Instituto Nacional de Cultura, Perú.

マヤ文字のアハウ（T533）のもう 1 つの読み

八杉佳穂　（国立民族学博物館）

アハウ文字 (Thompson のカタログ番号で T533 と表記) は、これまで ahau(ajaw)、nik/nich と読まれてきた。上下逆向きのアハウで la と読まれる文字 T534 も T533 と交替することがある。

マヤ人は父方の子供と母方の子供の区別をする。碑文では、父方の子供は T1.535 で表わされる。T535 はアハウ T533 に火の文字素 T122 (k'a)がついたものである。

Bonampak St.1　　Tikal St.5　　Copan St.9

T1:122:533　　T204.122:533:24　　T1.122:533:23 (T1 は T204 と交替可)

（図 1）父方の子を表わす文字

1991 年に Nikolai Grube and Werner Nahm はアハウをニック/ニッチ nik/nich「花」と読み、父方の子の文字を u-nichin と読んだ。これはアステカの 260 日暦を構成する 20 日の 1 つである xochitl「花」が、マヤの 260 日暦のアハウに当たるところから着想されたものと思われる。花はユカテク語で nik であり、確かにそれを T533:102(nik-ki)で記したと思われる文字が土器に描かれている（K1599：Justin Kerr が K 番号をつけてマヤ土器の展開写真を公開している）。

（図 2）T204.533:102 (K1599 の土器に描かれている花の前にある文字)

しかし、ツォツィル語やツェルタル語では花は nich-である。

ユカテク	チョルティ	チョル	ツェルタル	ツォツィル
nik	nich, nichir	nichim	nich, nichim	nichim

（表 1）花の語彙

そして父方の子は nich'-(ツォツィル語 nich'onil、ツェルタル語 nich'an)であり、異なる語である。マヤ人は ch と ch'を決して混同することはなく、また、マヤ文字時代、マヤ祖語の

*k/*k’は、低地南マヤのチョル語群やツェルタル語群のように ch/ch’に変化しておらず、k/k’のままである。そのため、音韻法則を無視したこの解読は受け入れられない。

マヤ祖語	低地北マヤ(Yucatecan)	低地南マヤ(Cholan, Tseltalan)	高地マヤ
*k	k	ch	k
*k’	k’	ch’	k’
*q	k	k	q
*q’	k’	k’	q’

（表 2）マヤ祖語と各グループの音韻対応

260 日暦のアハウの日は、高地マヤ諸語のキチェ語やカクチケル語などでは Hunahpu(Junajpu)、アワカテ語やポコムチ語では Aj pu’である。Pu(b)は吹き矢である。

マヤ土器に吹き矢を描いたものがある (K4151)。ちょっとした遊び心であろう、吹き矢の玉にアハウ文字が描かれている。吹き矢の玉はユカテク語で ol という。この読みを父方の子の文字に当てはめると、u-k’aol となる。これはまさにイシル語やカクチケル語、クァンホバル語、クェクチ語などにみられる語である。

低地マヤ	**父方の子**	**高地西マヤ**	**父方の子**	**高地東マヤ**	**父方の子**
ユカテク	mehen	ハカルテコ	k’ahol	クェクチ	k’ajol/alal
ツェルタル	nich’an	クァンホバル	k’ajol	キチェ	k’ajool
ツォツィル	nich’onil	イシル	k’aol	カクチケル	k’ajol

（表 3）父方の子の語彙

なお、k’ajol/k’ahol の j/h は母音連続を避けるための子音挿入と考えられる。

マヤ文字は低地マヤ諸語で書かれたものである。しかし u-k’aol は高地マヤ諸語にしかみられない語である。そこでそれを示す何らかの工夫がいる。

この父方の子を表わす文字には、普通 T24 (li)が下接字としてつくが、T23 (na)がつくこともある。それらは音声補助符として機能して、li がつく場合は k’aol、na がつく場合は mehen と読むために使われたと考えられる。

アハウ文字 (T533) は死を表わす文字の構成素としても Ik’文字 (T503) とともに用いられる。ol も ik’も「霊、魂」といった意味がある。死はある意味で「魂が行ってしまう(*benel ik’*魂が行く＞死ぬ)」ことであり、そのために用いられた可能性がある。

K4151

チャビン現象を問い直す：ペルー中央高地からの視座

松本雄一（国立民族学博物館）

神殿を中心とした社会統合によって定義づけられるアンデス形成期（紀元前 3000 年-紀元前後）は、人口の集中、モニュメントの出現、社会の階層化、権力の発生など、文明形成過程における極めて重要な変化が起きた時代と位置づけることができる。3000 年間にわたる形成期という時代を考えたときにそこにはいくつかの画期が認められる。中でも長きにわたって考古学者の注目を集めてきたのが形成期後期（紀元前 800-紀元前 250 年）、欧米で用いられる編年体系において前期ホライズンとされる時期である。この時期には社会組織の明確な階層化を示す埋葬や、遠隔地との交流を示す希少財/威信財が中央アンデスの広い範囲で確認されるようになる。また、2000 年代に入ってからの絶対年代試料の量的蓄積と較正年代の使用によって、このような変化が大きく加速した時期が形成期後期前半（紀元前 800-紀元前 500 年）に対応することが分かってきた。社会組織の変化や地域間交流の活発化という点に焦点を当てた時に、この時期に明確な画期が存在するという点は研究者間で共有された認識であると言ってよい。

しかし、上述した変化の背景にあるメカニズムを考察する際には、アンデス考古学で 1 世紀近くにわたって続く対立が表出する。この変化を汎地域的な現象としてどのように理解するかという以前に、そもそも汎地域的な現象として認めるかどうかに関して対立する立場にわかれているのだ。この問題は、ペルー北部高地南部の大神殿、チャビン・デ・ワンタルの位置づけとの関係の中で議論が展開されてきたことから「チャビン問題」と呼ばれ、付随する物質文化のパターンや想定される社会変化を分析対象とする場合は「チャビン現象」として扱われる。

学史上この問題/現象は、チャビン・デ・ワンタルとクピスニケ文化、チャビン・デ・ワンタルと北高地の大神殿などペルー北部を中心として対立軸が構成されることで議論が進み、中央高地以南の地域は周縁的な要素としてそれぞれの対立軸に付随するものと解釈されてきた。しかし、中央高地南部の大規模神殿であるアヤクーチョ地方カンパナユック・ルミ遺跡の調査をはじめとして、近年ではワンカベリカ、ワヌコ、フニンなどで相次いでこの時期の神殿遺跡の調査が進展し、それぞれの社会が規模の大きい神殿有し、地域間交流のなかで大きな役割を果たしていたことが明らかとなりつつある。中央高地の社会を周縁として扱うのではなく、重要なアクターとしてチャビン現象を考察する枠組みの中に組み込む必要性が浮かび上がってきたといえるだろう。

本発表においては、チャビン問題／チャビン現象をめぐる学史を踏まえたうえで現時点での課題を抽出し、中央高地における形成期後期をめぐる新たなデータを組み込んだうえで今後のチャビン問題/現象を考察するための枠組みを更新することを試みたい。